毎日歌壇

加藤　治郎　選

八十年まへの暑き日ひざまづきただ一度だけ聴きし玉音　東京　大村　森美

△評▽玉音放送を聞いた当時の回想である。再放送はなかった。子どもだった自分にも一度だけの特別な思いがあったのだろう。

温室のやうな老人ホームにて眠れる父をぢつとまなざす　八千代市　朱　虹

△評▽空調が行き届いている老人ホームである。父の穏やかな様子を見ているのだ。

この茄子と胡瓜は家で採れたものトマトも少し色づいてきた　仙台市　梅津シゲル

ムヒが効く体質の父ウナが効く体質の母だと知る会話　大津市　佐々木敦史

「どうして退院、決まらないのでしょうか?」「詰問を主治医にしつつ理由はわかる　直方市　大石　聡美

泣いて泣いて泣いた翌朝脳ミソが絞った雑巾の形している　広島市　堀　眞希

ねぇ世界、知らない言葉を教えて。もうどこにも行かなくて済むように　平塚市　芝澤　樹

まっくろなマグをメリケンサックのように握って会議へいこうじゃないか　札幌市　アゲとチクワ

一人だけ　雨　って言った焼け焦げた地平にちいさな影を描いて　横浜市　砂月　七

さようなら　鋼のように火のように夏の荒波くずれるように　東京　青木　公正

水原　紫苑　選

白鳥があなたの鎖骨でその羽を休める夢に私はいない　東京　境　千尋

△評▽それは誰の夢だろう。いずれにしろ、白鳥はそこにはいない。そこでは歌えない。

夜なんて来るから光らねばならぬ昼月のまま虚けてゐたい　甲府市　村田　一広

△評▽昼の白い月でいる方が気楽なのか、光ることは疲れるのか。

青薔薇の裏面は空か海でありどちらも経由して水鳥は　枚方市　久保　哲也

昆虫は眠れるものか複眼のすべてに月を映しながらも　福津市　原田　冬

灯台を抱えてねむる　もう誰も理不尽に傷付けられないで　名古屋市　よだか

水がいま容器の形を覚えていく縛られるなら今しかないよ　豊橋市　太田　貴大

階段は皆うつくしいすれ違うそれぞれ海へ向かう途中で　東京　無地ムジカ

満月の檻を脱したうさぎたちまずは言葉を狩りに駆けたり　加古川市　石村　まい

小鳥・鈴・わたしのなかでわたしだけ小鳥も鈴も買える寂しさ　東京　石川　真琴

午後までに紙の余白を埋めておくくもりはれはれあたたかいあめ　横浜市　大原　香花

伊藤　一彦　選

ハンカチを落としましたよと渡されて恋始まらず昭和は遥か　仙台市　小野寺寿子

△評▽かつての恋は日常のふとした出会いから始まったか。今はネットなどのきっかけも多いか。いずれにしても昭和は遠い。

きみらしい返信さえもAIがもっともらしく書いてくるかな　堺市　一條　智美

△評▽ラブレターもAIが書いてくる時代。「きみらしい」をチェックする明敏さ。

連れ添って五十五年と指折れば「鰤大根」とあなたは笑う　東大阪市　池中　健一

漱石の直筆見し夜いつもより丁寧に歌書きつけてみむ　東海市　中山あゆみ

部屋のなか点てたお薄を飲み干せば歴史の端にわたしも座る　狭山市　りんか

ジャンプするキーパーの指すり抜けてゴールネットは形を変える　宮崎市　門田　藍子

マウンドへ待避壕より走りゆく伝令いまだ軍事の名残　大津市　船岡　房公

戦争を指揮する者はいつの代も皺ひとつなき布をまとへり　横浜市　谷口　菜月

訃報受けめくる卒業アルバムに視線を逸らす君が在りたり　大分市　赤峰　宏史

不始末で靄のかかった週末はだらだらと続く街を歩いた　東京　藤沢　静二

米川千嘉子　選

徐行もせず信号無視をした人生　一旦停止のふりをしている　三重　中山由賀子

△評▽もちろん全体が比喩だが、その結果したたかに痛い目にあったのだろう。しかしそれでもまた。そんな気配が下句に。

愛息を施設に託す妹よ大丈夫同じ空の下だよ　見附市　岡村　文子

△評▽妹の心情を推しはかる作者。下句はさまざまな人の心にしみる言葉だろう。

駅前に一つ置かれた公衆の電話みたいに覚えていてね　松戸市　渡邉　理紗

大谷のファンですでもねアメリカに渡りし数多の選手も知りたし　幸手市　中村　早苗

これもまた愉快な私の道でしょう空へ行けない続く砂利道　横浜市　友常　甘酢

こんなにも見渡す限りの空のもと大屋根リングを孫とゆく夏　大阪市　小熊　光子

ミャクミャクと言うたび上がる口角を見つめるわれは置き去りでええ　河内長野市　寺田　愛子

「こっそりと秋は来ている」八ケ岳の桂の木より残暑お見舞い　習志野市　太宰　明子

今日こそはと叱咤をかけて草むしり「セールスマンが来ませんように」　春日市　林田　久子

おいあんた死んでるよってこの俺に一体誰が耳打ちするのか　浜松市　久野　茂樹

投稿規定

はがき1枚に選者を指定し、未発表の自作を2首・2句まで。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記し、宛先は〒100－8051（住所不要）毎日新聞学芸部、短歌は「毎日歌壇」、俳句は「毎日俳壇」、○○先生（希望選者名）係へ。毎日新聞デジタルの投稿フォーム（https://mainichi.jp/kadan-haidan/）でも受け付けています。

他媒体との二重投稿や、同一作品を複数の選者に投稿するのは厳禁です。投稿は趣旨を変えずに添削することがあります。

入選作は毎日新聞社の電子メディアやデータベース、アプリ「俳句てふてふ」で公開し、本社が作成または許諾した出版物やメディアに掲載することがあります。